

令和6年度(2024年度)  
第1回 鞠智城講座

令和7年(2025年)1月26日(日)  
山鹿市立菊鹿公民館 大会議室 於

1 開会(13:30)

2 講演(13:35)

「古代山城の城門構造 - 九州を中心に - 」

講師：九州歴史資料館 埋蔵文化財調査室長 吉田東明

「堀切門の構造と築造技術」

講師：歴史公園鞠智城・温故創生館 文化財整備交流課長 宮崎敬士

(休憩15分)

3 ディスカッション(14:50)

「鞠智城の堀切門を考える」

コーディネーター：歴史公園鞠智城・温故創生館長 長谷部善一

4 質疑応答(15:20)

5 閉会(15:40)

熊本県立装飾古墳館分館

歴史公園鞠智城・温故創生館



## 古代山城の城門構造 ～九州を中心に～

九州歴史資料館 吉田東明

### 1. 九州の古代山城

#### 7世紀の東アジア情勢

古代山城とは、我が国の飛鳥時代から奈良時代頃にかけて、西日本各地の山に築かれた城郭施設の総称である。

7世紀前半、朝鮮半島は高句麗・百済・新羅の三国鼎立状態にあった。618年に統一帝国を形成した唐は640～650年頃に全盛を迎え、各方面への侵略を企てるようになる。645年に新羅の救援要請を受けた唐は朝鮮半島に直接介入し、唐・新羅連合軍は660年に百済の都、泗泚（しひ・サビ）城を襲い百済を滅亡させた。

百済の遺臣たちは復興のための援軍を倭国に要請した。斉明天皇は救援のための援軍派遣を決定し、斉明七年（661）に筑紫に遷居するが（朝倉橘広庭宮）、当地にて死去する。中大兄皇子は称制という形で大王位を代行して派遣軍を渡海させ、天智二年（663）に白村江にて唐・新羅連合軍と会戦したが、大敗を喫する結果となった。

白村江の戦い後、倭国に対して唐が新羅と連合することはなく、やがて唐・新羅両国は対立関係に陥る。天智七年（668）に唐は高句麗の内紛に乗じて高句麗を滅ぼしたが、同年、新羅と倭国の復交がかない、両国の緊密な交流が行われることとなった。天武五年（676）年には唐が遼東へと退却し、新羅は朝鮮半島統一を果たしたのである。



7世紀前半頃の東アジア状況

#### 日本の古代山城

天智二年（663）年の白村江での敗戦後、倭国は唐・新羅の侵攻に対する防衛体制の緊急整備が国家的急務となり、このことが山城築造の直接的な契機になったとみられる。『日本書紀』によれば、白村江敗戦翌年の天智三年（664）に対馬・壱岐・筑紫国等に防（さきもり）と烽（とぶひ）を置いて筑紫に水城を築き、さらに翌天智四年（665）には長門国に城を築き、また、百済亡命高官の達率憶禮福留（おくらいふくる）・四比福夫（しひふくぶ）を筑紫国に遣わして大野・椽（き）（基肄）の二城を築かせている。さらに、天智六年（667）には倭の高安城・讃岐屋嶋城・対馬金田城を築く。天智三年（664）以降、矢継ぎ早に行われた防衛体制の構築過程をみると、まずは筑紫国までの情報伝達手段を整備し、次に大宰府を中心とした防衛網を整え、さらに都に至るまでの海路沿いの要衝に拠点となる山城を築

き、防衛体制を構築していった様子うかがわれる。

現在までに西日本の各地で見つかっている古代山城は、22ヶ所を数える（怡土城を除く）。これらのうち、『日本書紀』や『続日本紀』に登場する古代山城は6ヶ所あり、これらは「朝鮮式山城」と呼ばれている。また、記録には登場しないが遺跡として確認されている

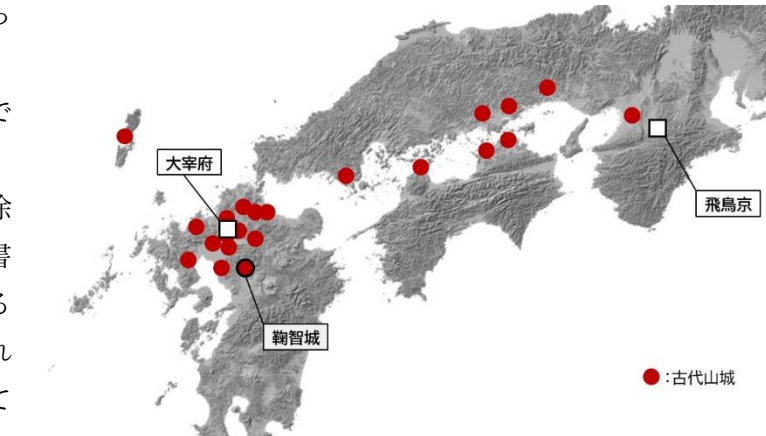
古代山城も16ヶ所あり、これらは「神籠石（こうごいし）式（系）山城」と呼ばれてきた。「朝鮮式山城」と「神籠石式（系）山城」には構造上の共通点も多く、築造時期も近接すると思われることから「古代山城」と総称されている。なお、文献史料に登場するが所在が分からない山城も5ヶ所ある。

さらに、近年では新たな古代山城（長者山城、他）発見の報告もある。

#### 九州の古代山城

古代山城は、九州北部から瀬戸内海沿岸を経て畿内に至るまでの間の、陸上・海上交通の要衝に置かれており、特に九州の北・中部には古代山城が集中して分布する。その数は14ヶ所を数え、我が国の古代において、内政・外交・軍事の面で重要な役割を果たした「大宰府」の擁護が、国防上の最優先事項だったことがわかる。

大宰府は周囲を山々に囲まれた天然の要害の地にあり、北に位置する四王寺山には大野城、南の基山には基肄城、北西の福岡平野へと続く狭い平地部には、そこを塞ぐように水城が築造された。筑後平野に面した東側には阿志岐（あしき）山城が築かれた。さらに、水城の北西には小水城と呼ばれる小型の土塁が3ヶ所で見つかっており、また、基肄城の東側でも小水城に類似する土塁が2ヶ所確認されている。このように、大宰府の周囲には、一連の大宰府防衛構想に基づいて要衝に山城や土塁を築造し、自然地形と一体となって「大宰府外郭線」の形成が行われた。また、大宰府外郭線のさらに外側、各地域で交通の要衝となるような場所にも古代山城が築造された。



古代山城の分布



九州の古代山城の分布

## 2. 古代山城の築造時期

### 古代山城一覧

※名称は〇〇城で統一

	名称	旧国	石材加工	標高 (峻/緩)	城門 (平/懸)
1	大野城	筑前	野面	410m (峻)	9 ヲ所 (平・懸)
2	基肄城	肥前	野面	416m (峻)	4 ヲ所 (平?)
3	金田城	対馬	野面	276m (峻・緩)	4 ヲ所 (平・懸)
4	屋嶋城	讃岐山田郡	野面	292m (峻)	1 ヲ所 (懸)
5	高安城	大和		488m (峻)	
6	鞠智城	肥後	野面	169m (緩)	3 ヲ所 (平・懸)
7	阿志岐城	筑前	切石	339m (峻)	
8	雷山城	筑前	切石	483m (峻)	
9	鹿毛馬城	筑前	切石	70m (緩)	
10	杷木城	筑前	切石	130m (緩)	
11	高良山城	筑後	切石	252m (峻・緩)	
12	女山城	筑後	切石	202m (緩)	1 ヲ所
13	御所ヶ谷城	豊前	切石	247m (峻)	7 ヲ所 (平)
14	唐原山城	豊前	切石	73m (緩)	
15	帯隈山城	肥前	切石	174m (緩)	1 ヲ所 (平)
16	おつぼ山城	肥前	切石	66m (緩)	2 ヲ所 (平)
17	石城山城	周防	割石	350m (峻)	2 ヲ所 (平)
18	永納山城	伊予	割石	128m (緩)	2 ヲ所 (平?)
19	讃岐城山城	讃岐	野面	462m (峻)	2 ヲ所 (平)
20	鬼ノ城	備中	割石	403m (峻)	4 ヲ所 (平・懸)
21	大廻小廻城	備前	割石	198m (峻)	3 ヲ所?
22	播磨城山城	播磨	野面	458m (峻)	1 ヲ所 (平?)

亀田修一 2016・向井一雄 2019 をもとに作成

### 古代山城の分類

これまで、わが国の古代山城は「朝鮮式山城」と「神籠石式 (系) 山城」の二つに分類されてきた。「神籠石」とは本来、列石のことではなく磐座 (いわくら) や神体石の一種のことを指す名称である。久留米市の高良山にある列石線が「神籠石」と紹介されたことがきっかけで、その後、同様の列石線に対しても「神籠石」呼ばれるようになったが、高良山にある「神籠石」とは、本来、高良大社参道にある「馬蹄石」のことを指す。また、わが国の古代山城は怡土城 (756 年築城) を除くすべてが朝鮮半島に技術的系譜を持つ構造であるため、その意味ではすべてが「朝鮮式山城」である。



従来は、文献に記載のない古代山城に対して「○○神籠石」という名称で史跡指定が行われた経緯があったが、近年では「○○山城跡」という名称が付されるようになってきた。また、古代山城に対する調査研究が進展した現在では、両者の線引きがそれほど明確ではないということも分かってきた。

#### 構造の違い

古代山城の分析視点は多岐にわたるが、ここでは、古代山城が築かれた地域、占地（峻しい／緩やか）、石材加工、門の構造、を対象とする。

九州北部地域には、多数の古代山城が集中している。この分布状況から、九州北部地域を対外防衛の前線として位置付け、ここから瀬戸内海を経由して畿内に至るまでの要地に山城を配置するという全体的な防衛構想だったことがわかる。

文献に記載のある諸城（朝鮮式山城）のうち、金田城は対外防衛の最前線として、大野城と基肄城は大宰府の防衛を主目的として配置されたことはまず疑いない。屋嶋城や高安城は実態が不明確な点が多いが、屋嶋城は瀬戸内海の要衝として、高安城は畿内防衛の最終防衛線の役割を担っていたものとみられる。鞠智城については、大宰府から遠く離れ、また内陸部に位置するため、対外防衛の意図を汲み取ることが難しく様々な見解が出されてきた。

文献に記載のない諸城（神籠石式系山城）のうち、筑前が4ヶ所と多いのは、やはり筑前地域に防衛すべき拠点が置かれていたことを意味する。筑後・肥前・豊前は各2ヶ所、それ以外の地域に関しても1～2ヶ所の割合で設置される。九州北部の諸城は、すべてが大型の石材を整美に加工した、切石による列石線を伴っていることが大きな特徴で、対して瀬戸内海沿岸の諸城は割石・野面石材による。この点では瀬戸内海沿岸の諸城は、大野城・基肄城・金田城・鞠智城など文献に記載のある城と近い関係にあると言える。

諸城が置かれた標高（占地）に関しては、瀬戸内海沿岸の諸城は標高が高く峻しい場所に築かれる傾向にあるのに対し、九州北部の諸城では低くてなだらかな場所に築かれるものが複数ある。この点については、防衛を目的として設置されたというよりも、すぐ近くを通る駅路から見えることを意図した、いわば「見せる」ことを目的に設置された城として理解されている。

城門については、入口に段差がない平



阿志岐山城の基底部列石



鹿毛馬城

門(ひらもん)構造と、段差のある懸門(けんもん)構造の二種類がある。狭くて段差のある懸門の方が出入りにくく、より防御性の高い構造とみていいだろう。懸門の所在が知られる大野城・金田城・屋嶋城・鬼ノ城はどれも標高の高い場所に築かれており、防御性を重視したための懸門構造の採用とみられる。これに対し、鞠智城を除いて、標高の低い場所にある諸城には懸門構造は採用されていない。



鹿毛馬城の列石

#### 古代山城の造営時期

大野城・基肄城の築城は白村江敗戦から間もない天智四年(665)、金田城・屋嶋城・高安城は天智六年(667)であることが『日本書紀』の記載内容から知られているが、これを築城の開始年とみるのか完成年とみるのかで、築造契機に関する認識が大きく異なってくる。また、文武二年(698)繕治の記事から、鞠智城の築城もほぼ大差ない時期と考えられる。

従来、文献に記載のない諸城に関しては、文献に記載されなかったのは既に忘却されていたため、というように理解して文献に記載された諸城よりも古くみる傾向にあった。

雷山城(雷山神籠石)の調査所見に基づき「愚城論」と称した原田大六は、敏達十二年(583)の日羅の奏言にある、要害の地に築くべき「塁塞」を神籠石の築城記事に想定していた。鏡山猛は、おつぼ山城の調査で検出された列石前面柱の柱間間隔が3mであることを根拠に「唐尺使用」、つまり大化改新の645年以降と理解した。これには切石による構築技法が終末期古墳にも共通するとみる斎藤忠の見解も補強材料となった。

よく知られた言説に、渡辺正気の「斉明天皇西下時築城説」がある。これは、斉明四年(660)の「是に由りて国家(くに)、兵士甲卒(いくさびと)を以て西北(いぬい)の畔(ほとり)に陣(つら)ぬ」「城柵(さかき)を繕修(つくろ)い山川を断ち塞ぐ兆(しるし)なり」の記事を、斉明の西征と山城築造を指したものと解釈する説である。

その後、考古学的見地からの分析が進展し、現時点では、文献に記載のない九州の諸城を、記載のある諸城よりも概ね後の時期に置く見解が優勢になりつつある。



御所ヶ谷城 中門



帯隈山城では、6世紀代に製作されたとみられる陶棺を破壊して列石線が構築されており、女山城では城内に後期群集墳が構築されていることから、6世紀末よりも遡ることはないともみていい。また、出土土器による年代観では、多量の土器が出土したことから鬼ノ城の築造・維持年代が7世紀第4四半期を中心とすることが明らかになった。その他にも、時期比定の難しい破片資料のため決定的な根拠とはならないが、御所ヶ谷城第2水門の発掘調査では7世紀第4四半期頃の須恵器長頸壺片が出土、鹿毛馬城暗渠裏の水溜遺構でも7世紀頃の須恵器甕片が数点出土している。

占地や石材加工法、懸門構造の採用といった点において、大野城や基肄城、金田城と瀬戸内海沿岸の諸城は近い関係にあり、出土土器の年代観では鬼ノ城を大野城・基肄城・金田城よりも少し後の時期に置くことができる。

文献に記載のない九州北部の諸城をすべて同一時期とみる必要はなく、段階的に造営されていったとみた方が現実的ではあるが、構築技術や切石加工の共通点をみると、これらの諸城はかなり近い時期に築かれたもののようである。防衛面よりも示威性を重視して「見せる」山城を設置した背景には、逼迫した臨戦状況を脱した後の、新羅との関係が改善した後の時代背景を反映したもの、とみた方が理に適っている。

九州北部の諸城の中に、駅路から見える側にしか城壁が築かれていない城や、丁寧に加工された列石はあるが土塁の構築がない、「未完成」としか考えようのない城が複数見られるのは、中央政権の防衛構想の転換や、体制の再編に基づくものとみられ、このような点でも文献に記載のない九州北部の諸城は、全体的傾向として新しく位置付けられる。

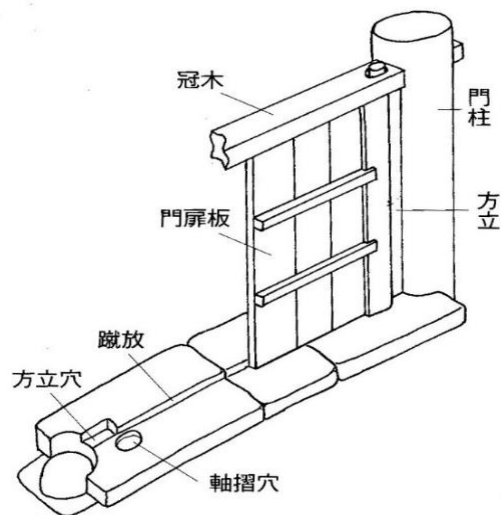
### 3. 古代山城の城門構造

#### 古代山城の城門

官衙に対して古代山城の門は防衛的側面を重視して構築する必要があり、そのため官衙の門と違って間口が狭く、堅牢に構築される傾向にある。

古代山城の門には、段差がなく水平または傾斜した坂道に造られる「平門」と、大きな段差があり梯子等を使用して出入りする構造の「懸門」がある。

大野城の場合、太宰府口城門は平門だが、クロガネ岩城門や北石垣城門は懸門となることが発掘調査によって明らかになった。クロガネ岩城門や北石



門の構造 (山田隆文 2011)

垣城門は、門から城内に入るとすぐ山の斜面に直面するため、必然的に曲がって進入せざるを得ない。平門構造の太宰府口城門でも、門の内側に板塀のような遮蔽物を設置しており直進できない構造を採っている点では同様である。

古代山城では門の下部に石製の門礎石（門礎・唐居敷（からいじき））を設置することが多く、官衙では石製の門礎石を使用せず、木製が一般的だったようである。文献に記載のない九州北部の諸城で門礎石が見つまっているものはなく、懸門構造の採用が確認された例もない。この点において、文献に記載のある諸城との構造的差異は顕著である。

古代山城の門礎石にはさまざまな形状がある。形状の差異については、これが時期的な変遷を示すと解釈する見方と、故地である朝鮮半島の系統差に基づく解釈する見方がある。

### 大野城の城門

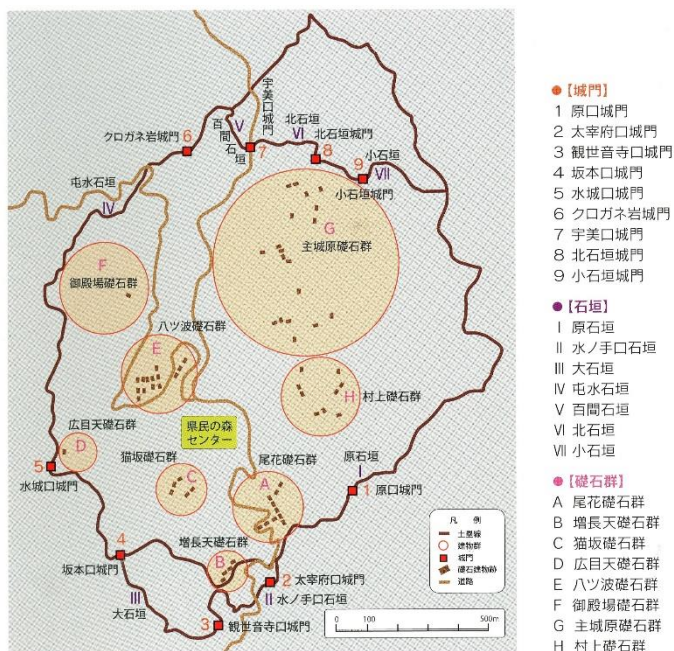
大野城の大宰府口城門では、7世紀後半から8世紀にかけて三期にわたる変遷が知られている。

第Ⅰ期（7世紀後半）：掘立柱建物で八脚門に近い構造となる。門幅9.3m。

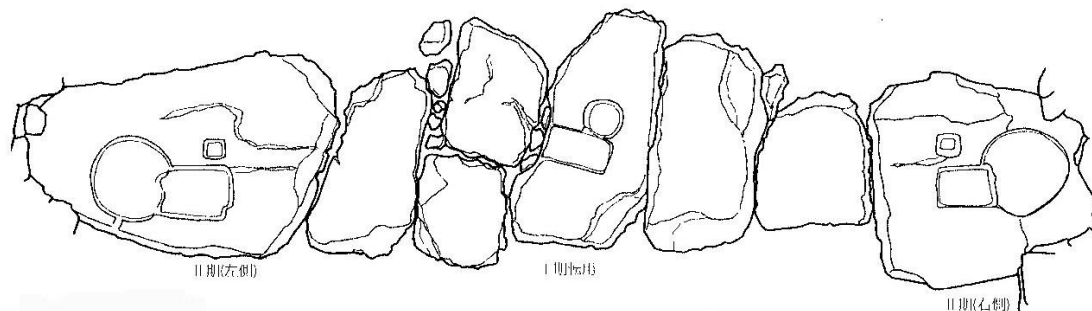
第Ⅱ期（8世紀前半）：瓦葺き礎石建物。地覆石にⅠ期門礎石を転用。門幅5.2m。

第Ⅲ期（8世紀後半以降）：瓦葺き礎石建物。門道側壁の石垣を修復。

Ⅰ期の門礎石は掘立柱に添えるための円弧状の削り方を設け、方立穴（ほうだてあな）と円形の軸摺穴（じくずりあな）を備える。両側にあるⅡ期の門礎石には柱を据えるための円形の柱座（はしらざ）があり、方立穴と小型方形の軸摺穴を有している。大野城ではこれら

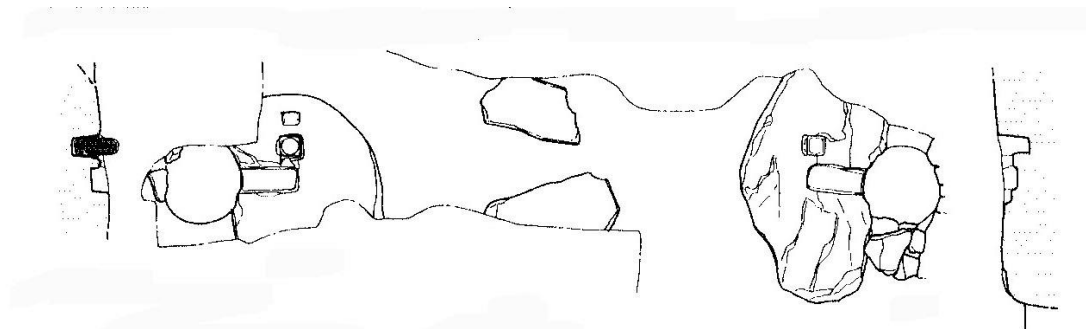


大野城跡



大宰府口城門の門礎石／大野城





北石垣城門の門礎石／大野城

以外にも形状の異なる門礎石が確認されているため、それらの差異を時期的変遷とみるのか、それとも技術集団の系譜差に基づくものとみるのかで意見が分かれている。

#### 大野城 北石垣城門

北石垣城門の門道は、城外側で幅 4.7m、城内側で幅 4.1m を測り、外側へと少し開いた形状となる。門道の両脇に立てられた柱に接する位置で、それぞれ門礎石が据え置かれた状態で見つかった。門礎石は柱に沿って円弧状の削り方があり、方立穴と方形の軸摺穴が削り込まれていた。これら二つの門礎石のうち、東側の軸摺穴には鉄製の軸摺金具（じくずりかなぐ）が嵌め込まれた状態で見つかった。

城門のすぐ外側には石垣が築かれ、さらにその外側には平坦面がある。平坦面と城門床面とは 1.5m ほどの比高差があることから、この北石垣城門は懸門構造であることが分かった。

#### 水城 西門

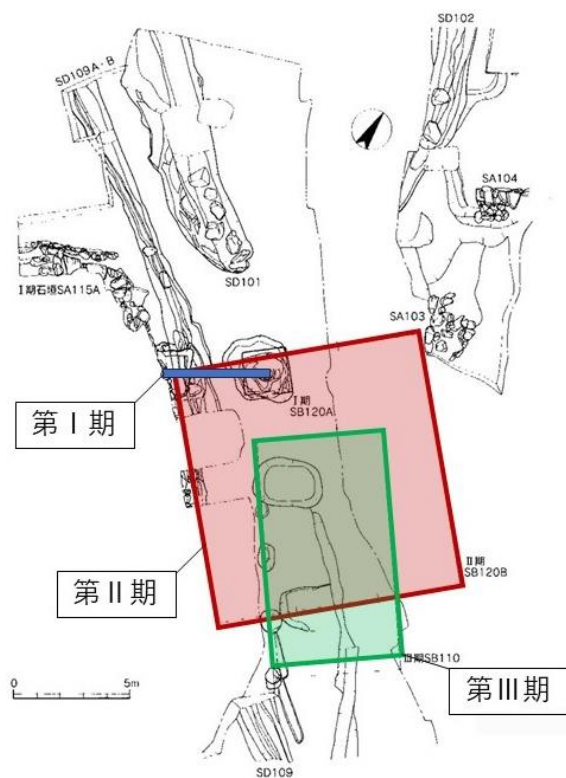
水城は東西に門が設けられ、福岡平野と大宰府とをつなぐ直線的な道路（官道）がそれぞれ通過していた。西門は発掘調査の結果、7 世紀後半から 8 世紀にかけて三期にわたる変遷が確認された。

第Ⅰ期（7 世紀後半）：掘立柱建物で 2 本柱、門幅 4.2m と推定される。通路壁面には石垣積みが行われている。

第Ⅱ期（8 世紀前半）：瓦葺き礎石建ちの八脚門で、門幅 11.5m（中央幅 4.5m）を測る。

第Ⅲ期（9 世紀）：瓦葺き礎石建ちの四脚門。門幅 5.4m の重層門に復元される。

変遷の過程をみると、第Ⅰ期は 2 本柱の簡素な造りで門幅も狭く、側面に石垣を築いた堅牢な城門だったものが、第Ⅱ期には屋根に瓦を葺いた壮麗な造りで門幅も 11.5m に広がり、防御よりも外見を意識した構築物に変化したようである。



水城西門

## 金田城 南門

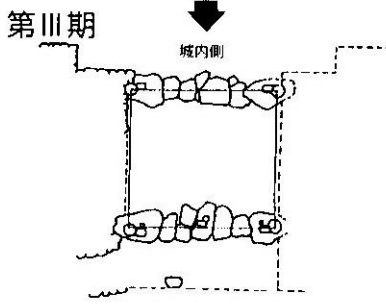
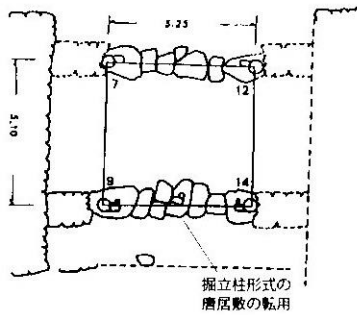
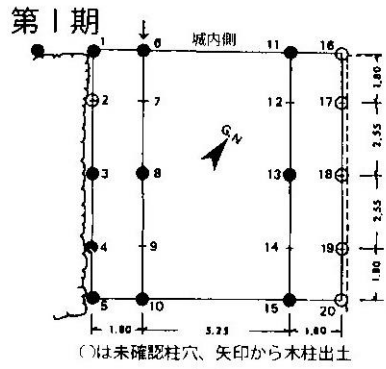
石塁による城壁が周囲を圍繞する金田城には「城戸」と呼ばれる三つの城門の他、新たに確認された「南門」や、内部の土塁に付随する「ビングシ門」がある。

南門の発掘調査では、間口1間、奥行3間の礎石建物跡が見つかった。城外側から2つ目の柱列に扉の軸摺穴がある。側壁には石積みが行われ、床面はすべて石敷である。門の外側から門道部分にかけて階段が構築される点が大きな特徴である。二ノ城戸門では間口1間、奥行2間の礎石建物跡である。城外側の柱列に軸摺穴があり、床面は石敷を行う。

### 門の種類・構造・幅の事例

内容は各報告書・論文に基づく

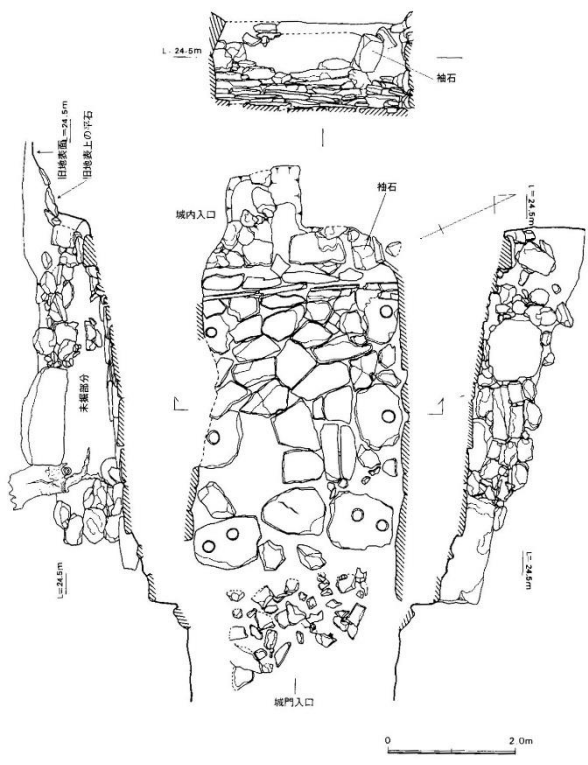
大野城太宰府口城門 第Ⅰ期・平門	掘立柱（3間×4間）	円弧状割り方 方立穴・円形軸摺穴	5.25m（柱間）
大野城太宰府口城門 第Ⅱ期・平門	礎石（1間×1間） 瓦葺き	円形柱座 方立穴・方形軸摺穴 蹴放石列	5.25m（柱間）
大野城太宰府口城門 第Ⅲ期・平門	礎石（1間×1間） 瓦葺き	円形柱座 方立穴・方形軸摺穴 蹴放石列	5.25m（柱間）
大野城水城口城門 懸門	掘立柱（1間）	円弧状割り方 方立穴・円形軸摺穴 蹴放材嵌め込み溝	3.8m（軸摺穴間）
大野城北石垣城門 懸門	掘立柱（1間）	円弧状割り方 方立穴・方形軸摺穴	4.1m（柱間）
大野城原口城門Ⅰ期	掘立柱（1間） 門外に石敷・石垣	円弧状割り方 円形軸摺穴	約3.6m（柱間） 門礎石Ⅱ期に転用
基肄城東北門	掘立柱（1間）	円弧状割り方 隅丸方形軸摺穴	約1.9m
金田城南門 懸門	礎石（1間×3間）	円形軸摺穴（排水溝）	2.38m（軸摺穴間）
金田城二ノ城戸門 懸門	礎石（1間×2間）	円形軸摺穴	2.8m
水城西門第Ⅰ期 平門	掘立柱（1間） 推定冠木門	円弧状割り方 方立穴・円形軸摺穴	4.2m（柱間）
水城西門第Ⅱ期 平門	礎石（3間×2間） 推定瓦葺き八脚門	方立穴・円形軸摺穴 （元位置から移動）	推定4.5m
水城西門第Ⅲ期 平門	礎石（3間×1間？） 推定瓦葺き楼門	方立穴・円形軸摺穴 （元位置から移動）	5.4m



太宰府口城門の変遷



金田城南門



金田城二ノ城戸門



## 堀切門の構造と築造技術

歴史公園鞠智城・温故創生館 宮崎敬士

### 1 鞠智城跡の城門

鞠智城跡でこれまで確認されている城門跡は、東から、深迫門跡、堀切門跡、池ノ尾門跡の計 3 か所である。いずれも鞠智城跡の南側に位置し、城外から城内に通じる谷部を塞ぐように立地している。また、城跡の北側谷部にも城門の存在が推定されるが未だ確認はされていない。確認された城門跡のうち、深迫門跡、堀切門跡は傾斜の急な谷部に立地するが、池ノ尾門跡は傾斜が比較的緩い谷部に立地するなど、同じ谷部といえどもその立地条件は異なる。そのような異なる地形条件に合わせて各城門及び付属施設が構築されていると考えられ、その構造解明のための調査を各城門跡において実施してきた。

### 2 堀切門跡の調査

#### (1) 位置と特徴

堀切門跡は、鞠智城跡の南側に位置し、東西に延びる舌状丘陵から南東方向に開口する谷部に所在する。地山が阿蘇溶結凝灰岩で形成されているため谷の両側壁には凝灰岩の露頭がみられる。門跡の標高は約 122m を測る。堀切門跡における発掘調査は、これまで第 1 次調査（昭和 42 年度）から第 2 次調査（昭和 43 年度）、第 20 次調査（平成 10 年度）から第 23 次調査（平成 13 年度）まで、第 33 次調査（平成 30 年度）から第 34 次調査（令和元年度）まで、3 時期 8 回にわたって実施されてきた。これまでの調査によって、2 つの軸摺穴が残る門礎石（唐居敷）のほか、門柱穴跡、側溝を伴う



Fig 1 空から見た鞠智城跡

道路跡、城壁等を確認するとともに、須恵器や瓦等が出土した。

各城門跡のうち、これまで明確な城門の原位置と城門を通過して城内にいたる道路跡が検出されたのはこの堀切門跡だけである。

## (2) 堀切門跡の調査

### 第1次調査（昭和42年度）

鞠智城跡では、城門礎石とみられるホゾ穴のある石材が3か所の谷部で確認されていた。その中の一つ、堀切地区の門礎石は、菊池市堀切より上りつめた旧道のほぼ中央部に埋没しており、これと相対する門礎石は堀切地区の木野神社の鳥居わきに据えられていた。

昭和42年7月29日から8月1日にかけて、門礎石の埋没状況の把握を目的とした発掘調査（7月29日）、門礎石の実測（30日）、深迫門跡が所在する谷部周辺の地形測量（31～8月1日）を実施した。

堀切は高さ約4mの鞠智城の外郭線かと思われる陵線を道路幅3.50mをもつて切りとおして通路をつくっている。この切りとおした南側、米原から言えば稜線の外輪に門礎石がある。門礎石は、はじめは崖に立てかけてあったが、あとで現在地に移転したという。調査時には流入した土砂におおわれて全くその所在がわからず、村民に尋ね、おおよその見当をつけて掘開作業を始め、深さ1.50mで初めて探し当てたほどであった。

門礎石は巨大な一枚石を用い、表面を削平して平滑にしている。平面形は長方形を基準とするが変形が著しい。石の長さは長軸線上で2.66m、幅はもっとも



Fig 2 堀切の門礎石



Fig 3 木野神社の門礎石

広いところで1.84m、石の厚さ約50cm～20cmの花崗岩である。門礎石表面の長軸線上、一側に寄って直径16cm、深さ15cmのホゾ穴を穿っている。穴は底部に近づくに従って狭くなり底径10cmとなる。穴の南側が磨滅の度が強く、穴の内壁の上線から約5cm下がったところに門扉回転軸の



Fig 4 堀切の門礎石のホゾ穴

受皿による茶褐色の鉄錆が残存している。門礎石のホゾ穴に近い一側面約40cmにわたって緩やかな弧状に欠き取られ磨研されている。おそらく門扉を支える掘立柱を建てた跡であろう。

同じ堀切の木野神社石段下に礎石がもう1基ある。古老の話では50年ばかり前に堀切の門礎のあった場所からここに移転したといい、前記堀切の門礎石と一対をなすものである。これを仮に木野神社門礎石と称する。木野神社門礎石の平面形は長方形に近いが、それも多少変形している。石の全長は短軸線上で80cm、長軸の最も幅の広いところで1.04mである。石表面の北端から24cmの点を中心として直径10cm、深さ14cmのホゾ穴がある。堀切門礎石と同質の花崗岩

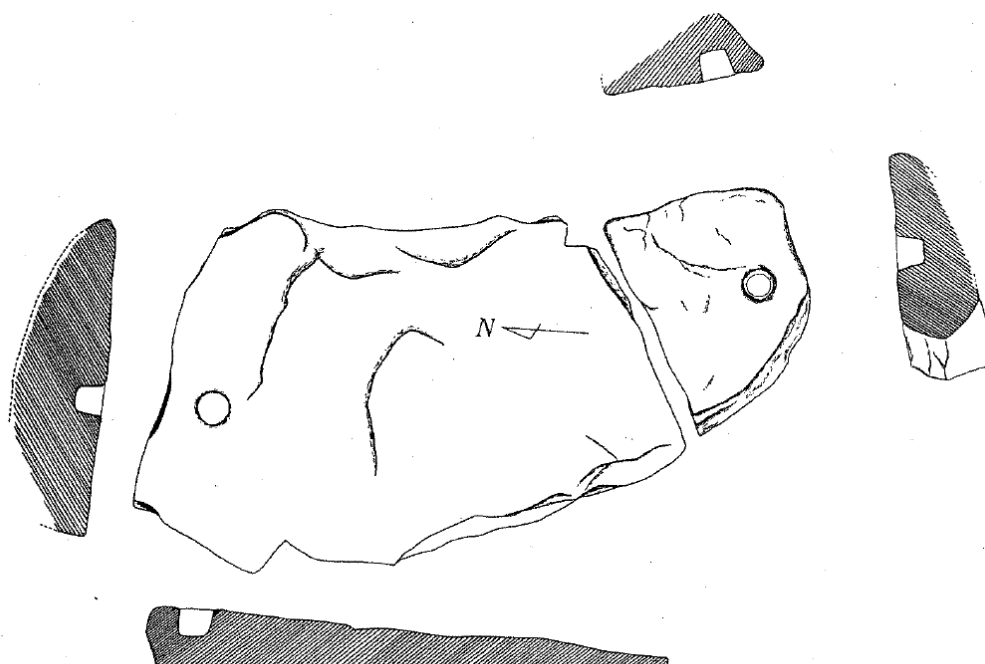


Fig 5 堀切と木野神社の門礎石の実測図 (第1次)



で全体に 10 度傾いている。調査終了後、堀切門礎石と木野神社門礎石の実測図をつきあわせたところ、この 2 個の門礎石はホゾ穴を両端において、各々の石の端が接合することがわかった。もと同一の個体であったのが割截されて一個は原位置近くに残り、他の一個は持ち去られて木野神社に運ばれたことが判明した。古老の話は必ずしも全部を尽くしていなかったけれども事実を伝えていたわけである。



Fig 6 堀切の地形図

第2次調査（昭和43年度）

鞠智城の外周を明確にするため土塁線の断面計測を実施した。昭和43年8月17日から23日まで、延べ一週間にわたり合計19か所の地点で実測調査が実施された。その中に「堀切トンネル堤の上」地点と「堀切門礎の上」地点の2か所が含まれている。

2か所とも山の尾根の外側と内側を切り落として懸崖にしたもので、尾根の頂部は平坦な面となり、その断面は梯形を呈する。

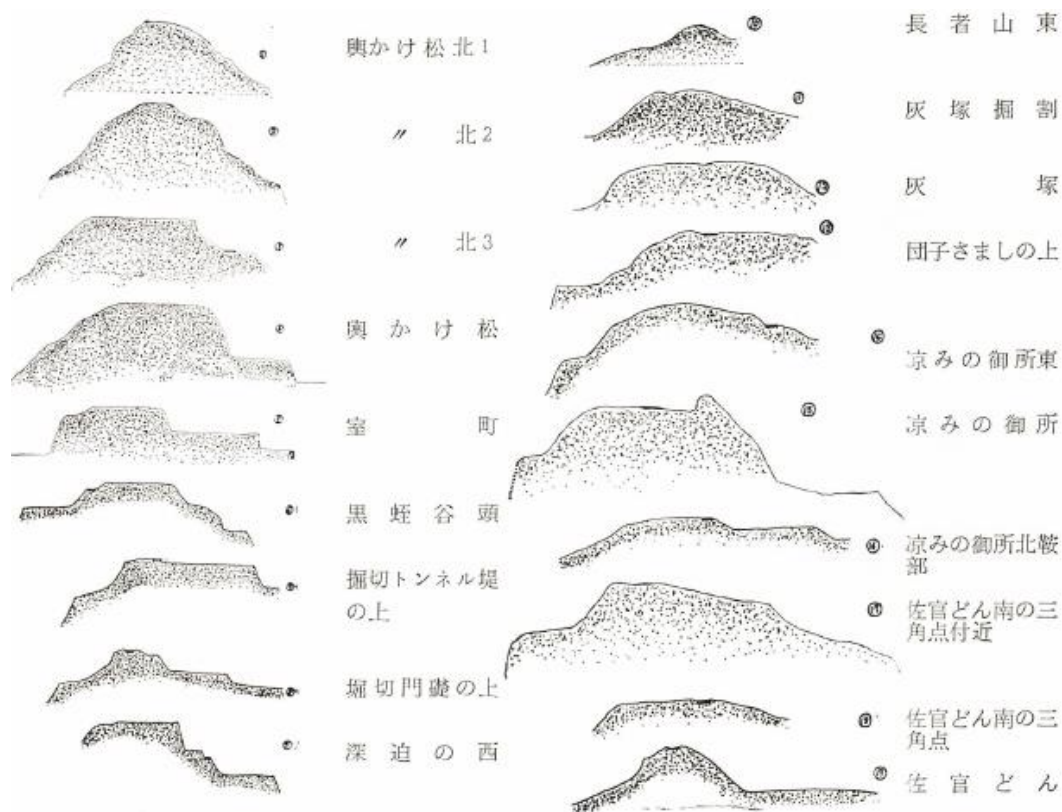


Fig 7 土塁の断面形の実測図

第20-23次調査（平成10-13年度）

堀切門礎石周辺は、調査前に計3本の道が確認できた。谷筋に2本あり、一つは、谷の西側際に添って堀切状地形の底を通る道で、もう一つは谷の中央をつづら折れ状に通る道である。2つ目の道で、城壁を一部壊している箇所は後世の掘削である。この他、丘陵の尾根筋に南西方向から延びる道がある。

堀切門礎石は、その3本の道のうち1つ目の道上にある。礎石は動いており、以前は上方の西壁に立て掛けられていた。

調査の目的は、堀切門跡等の遺構の位置及び道路遺構、並びに城壁の構造を解明することである。同時に、保存を目的とした調査であるため、必要最小限の発掘となるよう調査区（トレンチ）を設定して調査を行った。

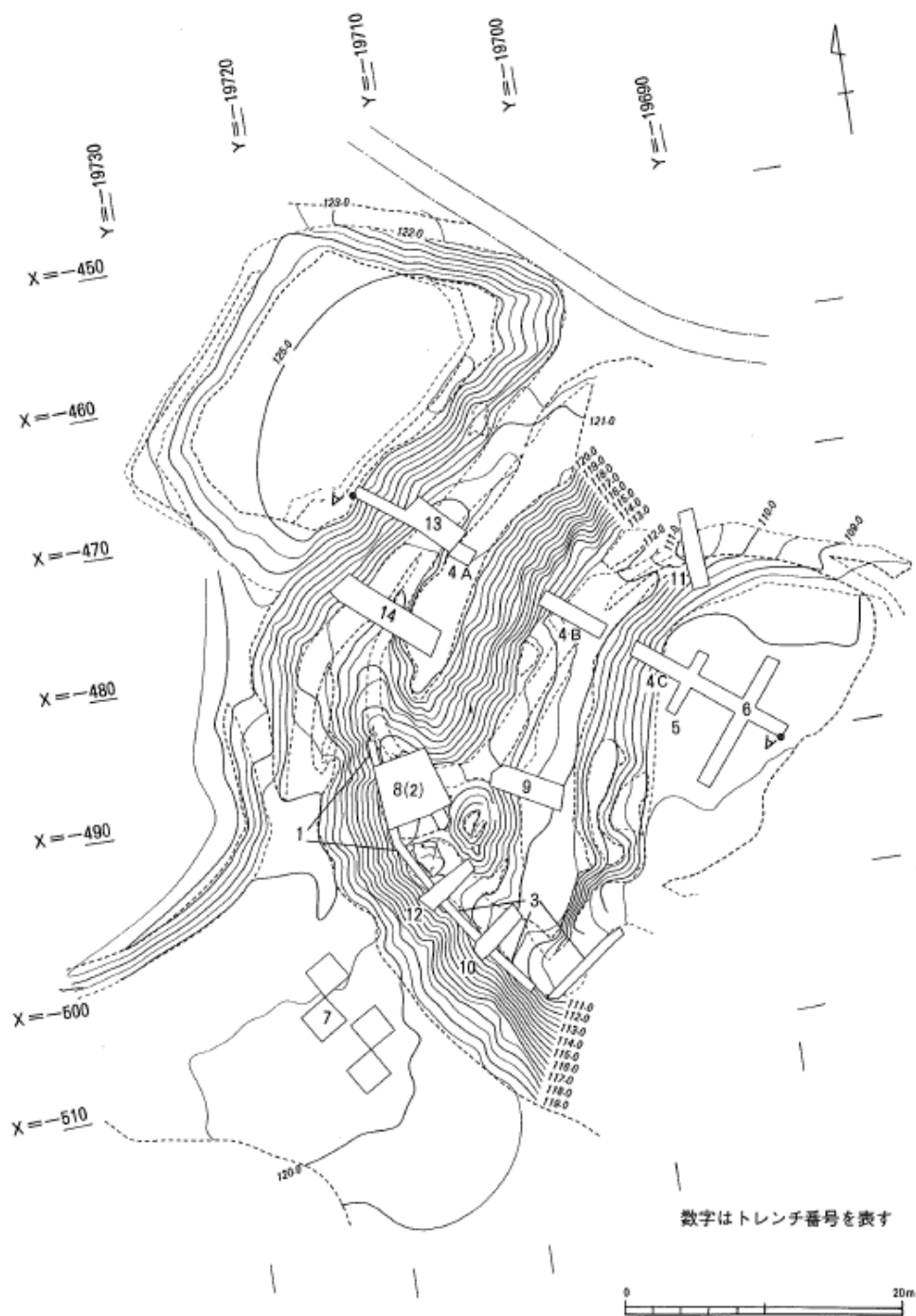


Fig 8 堀切門跡調査区位置図（第20・21次）



堀切門跡においては、門礎石のほか、門跡、側溝を伴う道路跡、岩盤削り出しの城壁を確認した。出土遺物には須恵器等があるが、遺構に伴っていない。

【門礎石】 長軸 355 cm、短軸 184 cm、厚さ 20～50 cmを測る花崗岩である。上面には明瞭な加工痕は残っていないものの、概ね平滑である。1つの石に軸摺穴が 2 つ存在するのが特徴である。両軸摺穴の心々距離は約 2.8m、門柱を受ける門礎石両端の削り込み間の距離は約 3.2m である。軸摺穴はともに、直径約 16 cm、深さ約 15cm である。軸摺穴の内壁には軸受けの機能をもつ鉄製受皿等の痕跡を示すものと思われる鉄錆が残る。また、各軸摺穴の外側、門礎石の両端には円弧状の削り込みがあり、これは門柱を受けるための削り込みと考えられる。

円弧状の削り込みから復元される門柱の直径はそれぞれ 95 cm、85 cm とかなり大きい。堀切門跡 16 トレンチで検出された門跡に伴う柱穴の復元径が約 60 cm であることから、門柱を受けるための削り込みはやや大きめに作られたものと考えられる。なお、この礎石は発見時 2 石に分かれていたが、現在は両者を接合し、堀切門跡横において保存・公開している。



Fig 9 堀切門跡全景（第 21 次）

【門跡】 登城道の傾斜が比較的緩やかになる変化点で、門柱になると考えられる柱穴 1 基を検出した。この柱穴は、掘方は 1 辺 82 cm の方形を呈し、深さは約 96 cm、復元径約 60 cm の柱痕跡がある。埋土は、しまりの強い灰黄色粘質土で、明確な分層は認められなかった。堀切門跡において道路跡沿いで柱穴を検出したのはこの 1 基だけである。対になる柱穴が想定される箇所は大規模な攪乱を

受けており、柱穴は確認できない。

確認された柱穴の周辺はほぼ平坦で門礎石を置くのに十分な広さがあることから、この柱穴が門跡に伴うものであり、堀切門がこの箇所が存在した可能性が高いものと考えられる。しかし、門礎石の据付穴はこれまでの調査においては確認できていない。また、柱穴の掘り込み面と下方の道路面との比高差が約 1.2m あるが、これについては、壁面が凝灰岩で形成されて



Fig 10 堀切門跡全景 (第 22 次)

いることから、門の直前に凝灰岩削り出しの階段が付設されていた可能性が考えられる。

**【城壁】** 城壁は、中段にテラス部を設けた 2 段構造である。城壁は、最下段から城壁中段のテラスまでは約 45° の傾斜で立ち上がり、中段のテラスからは約 40° の傾斜で最上段の平坦部へといたる。その比高差は約 12.8m を測る。この中段のテラスからは、灰土の間層を挟んだ層厚 10 cm 程度の黄褐色粘質土層を 3 層検出した。版築による盛土である。また、凝灰岩削り出しの城壁が確認され、その礫面に加工痕を確認した。

以上のことから、堀切門跡の城壁は、中段のテラス部分までは盛土により構築され、テラスより上位は岩盤削り出しにより城壁を築造したのと考えられる。

**【道路跡】** 道路跡は、地山の凝灰岩を堀切状に削り出し、礫面に粘質土を貼り付けて路面とし、その両側あるいは片側に側溝を設けた構造となる。

道路跡の痕跡は、8・10・12・13・16～20・22・23 トレンチで確認されており、南西壁側の堀切を通る長さ 30m ほどの道路跡を復元できる。道路跡の傾斜角は約 20° であり、城壁下位付近で屈曲を伴う。道幅は 1.8～2.7m と一定しないが、門直前と屈曲点より下方の道幅は比較的狭い。道路の使用時期は、出土遺物がほとんどないため明確ではないが、2 時期の道路跡が確認されている。

16 トレンチにおいては、道路跡の大半は消失していたが、両肩部に僅かに道路跡が残存していた。道路跡の幅は北壁近くの残存部から 3.63～3.75m と推定

され、南東側に僅かに傾斜するものの、ほぼ水平を保つ。また、このトレンチより、柱穴が1基確認されており、これは門跡に伴う柱穴であると考えられる。この柱穴より約1.2m下方のトレンチ南壁断面において、2時期にわたる道路跡の痕跡が確認されている。いずれも、柱穴上面の道路跡より約1m低い。I期の道路跡においては、一部に淡赤褐色粘質土の貼り土を検出した。II期の道路跡はI期に比べ道路幅が狭くなり、深さ18cmの側溝をもつ。これら道路跡は北東方向には延びずに南壁付近で終わり、柱穴上面の道路跡へ通じるものと考えられる。これら2時期の道路跡から比高差1.0m、奥行き1.2mの柱穴上面の道路跡への連絡については、後世の道路によって削られ判然としないが、壁面が凝灰岩で形成されていることから、凝灰岩の削り出しの階段が想定される。

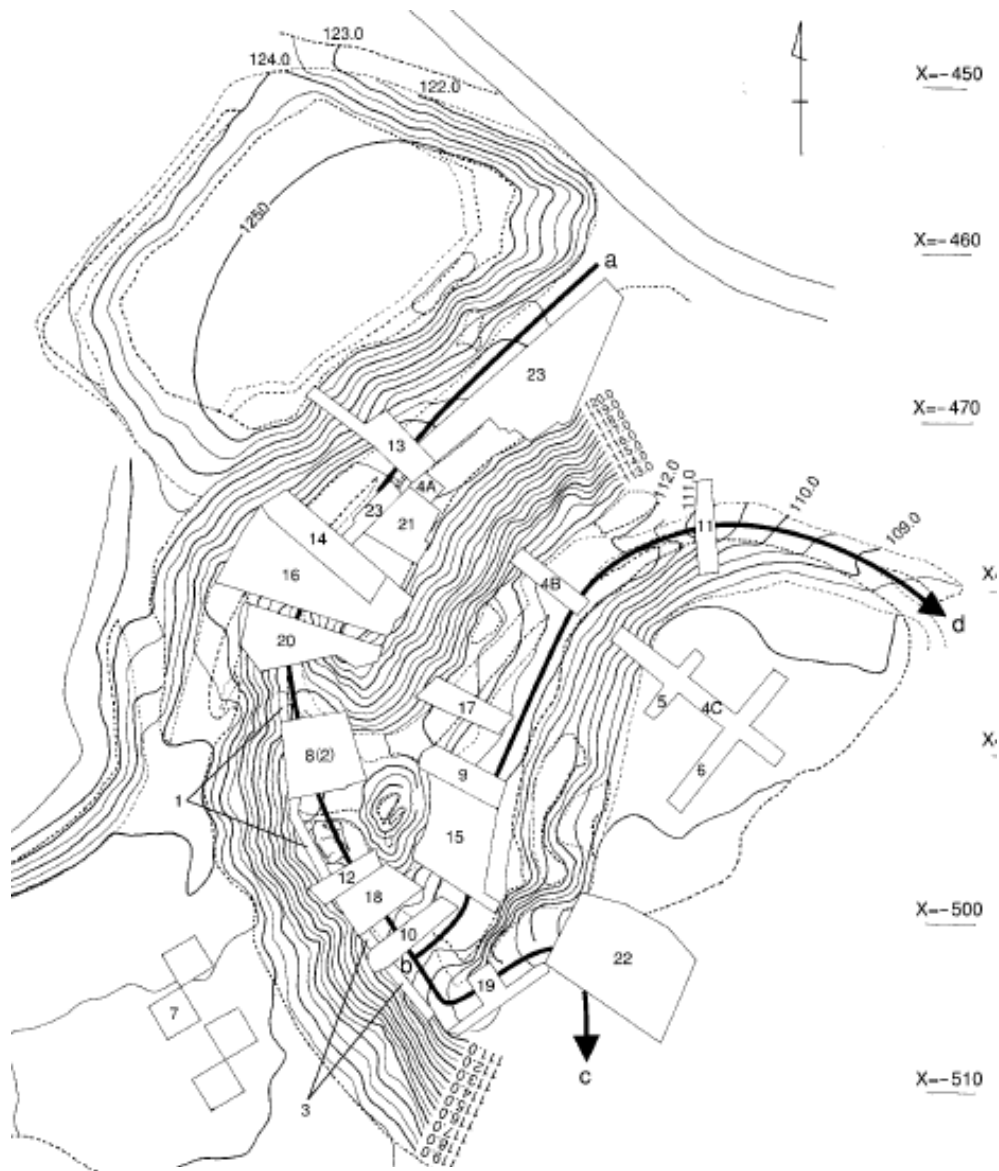


Fig 11 堀切門跡と登城道 (第23次)



第 33 - 34 次調査（平成 30 年度 - 令和元年度）

堀切門跡の北西側高台、門跡周辺、東側土塁下部を調査した。

高台部分は、1.8m程高い土塁等が存在した可能性があるが、地形が改変されて消滅していると考えられる。

門跡周辺は、唐居敷と柱穴の位置や門の上屋構造の再検討を行うことを目的とする調査である。門跡の柱穴跡 1 基と比高差 1.2m の道路硬化面を平面や断面で確認し、従来の見解どおり、懸門構造であると結論した。唐居敷については、縮尺 1/10 で実測し、現地検討を行った結果、柱痕跡と軸摺穴の位置関係から柱痕跡に近い方が城外側、軸摺穴に近い方が城内側であると判断し、城内と城外の向きを確定した。

東側土塁下部は、城壁は高さ 14.7m 以上であり、土塁は凝灰岩の壁に黄色の粘土と凝灰岩由来の土を交互に積む構造であることが判明した。

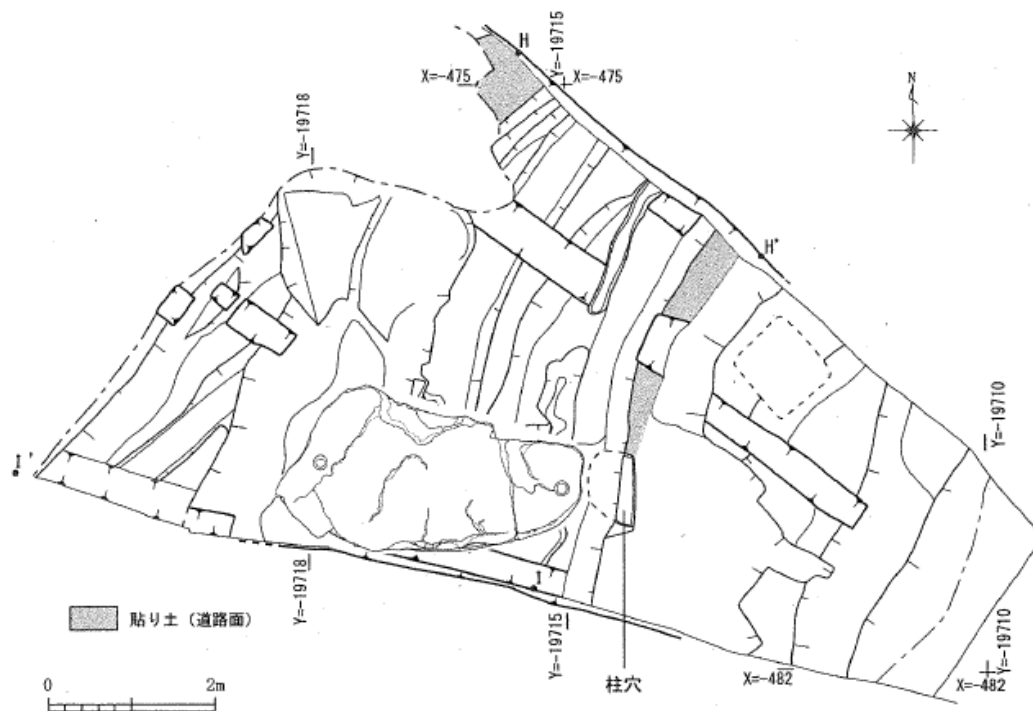


Fig 12 堀切門跡の復元図（第 34 次）

この文書は、鞠智城跡の総括報告書『鞠智城跡Ⅱ』と各調査報告書の記述を基に記述しています。

鞠智城講座 発表資料集

令和6年度（2024年度）鞠智城講座

**鞠智城の城門構造技術を考える2**

令和7年（2025年）1月26日

編集 歴史公園鞠智城・温故創生館

〒861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原 443-1

発行 熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺 6-18-1



鞠智城跡は、令和6年2月27日に史跡指定20周年を迎えました。

鞠智城シンポジウム、鞠智城跡「特別研究」、発掘調査報告などの書籍、ガイドブック、パンフレットなどを、(独)奈良文化財研究所が運営するホームページ「全国遺跡報告総覧」から無料ダウンロードできます。

「全国遺跡報告総覧」はこちら <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>



